

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

前提を問うことで見える新しい地平： 2013年5月の橋下維新の会共同代表の発言の批判的 談話分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 育美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5727

前提を問うことで見える新しい地平 —2013年5月の橋下維新の会共同代表の発言の批判的談話分析—

外国語学部准教授 朴 育美

1. はじめに

この論考では、国内外で大きく取り上げられ、批判された2013年5月の橋下大阪市長の発言と、その後の釈明会見での発言を取り上げ、前提を分析ツールに、マクロな視点から談話分析する。談話分析の手法には、「コンテクストを発話のやりとりそのものの中に埋め込まれたもの」として捉える「会話分析アプローチ」と、文化的社会的コンテクストは必ずしも発話のやりとりそのものに含まれているのではなく、むしろ発話の外から、発話を動機づけ、影響をあたえるものとして捉える「相互行為分析アプローチ」(林, 2002)があるが、この論考では、個々の語りを成り立たせている、社会的文化的文脈であるディスコースの重要性 (Shiffrin, 1994 : Gumperz and Levinson, 1996) に焦点をあて、マクロな文脈からの分析を試みる。

例えばフェミニズム批評理論 (例えばフェルマン, 1998 : 中村, 2001) は、「お医者さんの奥さんが」という文の出だしは、さらりと読めてしまうが、「お医者さんの旦那さんが」だと思わず読み返してしまうのは、医者が男であるということが、ディスコースで、自然なこととして不可視化されているからであると指摘した。同様に、批判的談話分析 (たとえば van Dijk, 1984, : Fairclough, 1989 : Wodak, 1996 など) は、ディスコースに依拠する個々の語りを分析することで、思考に無意識に忍び込む、権力、歴史、イデオロギーを批判的に検証しようとするアプローチである。例えば、Fairclough (1989, 1995) は、語りが、共有される暗黙の了解を前提¹として生産、解釈される語りとディスコースの相互依存的関係を明らかにし、無意識の前提を顕在化させることで、ディスコースで普遍的価値として、ヘゲモニーを獲得した特定の価値観を可視化する。Faircloughの前提概念は、児玉 (2008) の「ディフォルト」概念にも通じるものだ。

勿論、ディスコースの前提はひとつではないし、それは固定され、安定した枠組みでもない。しかし、当たり前として見過ごされている前提を顕在化させることで、私たちは自らが抱え込んだバイアスに、少しでも自覚的になることができるのではないか。そのような目的意識で、前提を分析ツールに、橋下氏の語りを談話分析し、日本のディスコースで、当たり前のこととして見過ごされている、価値観を顕在化する。また、橋下氏は、発言に対する外国メディアからの批判に対して、英語訳への過程で生じた「誤解」であると釈明したが、このような語りを成り立たせている、日本社会にある、異文化コミュニケーションに対する認識枠組みも明らかにしたい。

2. データ

従軍慰安婦問題などをめぐる、橋下徹日本維新の会共同代表の2013年5月の発言

- 1) 銃弾が飛び交う中で走っていくときに、どこかで休息をさせてあげようと思ったら、慰安婦制度は必要なのは誰だってわかる。(2013年5月13日昼、記者団に)
- 2) 「必要」という言葉がnecessaryと訳されてしまったのであれば、それは僕の表現不足であるし、修正してほしいということは言います。僕が必要だと思っていた、と訳されるならやめてほしいと。日本語の「必要」までは変えませんが、外国人に対しては、変えてほしいということとはしっかり言います。(2013年5月17日夜、記者団に)
- 3) 「慰安婦制度じゃなくても風俗業は必要だと思う。(司令官には)『法律の範囲内で認められている中で、性的なエネルギーを合法的に解消できる場所は日本にあるわけだから、もっと真正面からそういう所(風俗業)を活用してもらわないと、海兵隊の猛者の性的なエネルギーをきちんとコントロール出来ないじゃないですか』と言った」と(記者団に)述べた。橋下氏によると、「司令官は凍りついたように苦笑いになって、『禁止し

ている』と言った²。『行くなと通達を出しているし、これ以上この話はやめよう』と打ち切られた」(2013年5月13日、記者団に)

- 4) 橋下氏は、「風俗業の活用を」と進言したことに絡み、市職員のわいせつ事案が増えた場合に風俗業の利用を推奨することが「議論の対象になるかを記者団に問われ、「僕はなりうると思う。『何の罪もない人のところに行くくらいだったら、認められる範囲のところで対応しなさいよ』というのが本来のアドバイスだ」と主張した。(2013年5月16日、朝日新聞)
- 5) 「英語をしゃべれないことを痛切に感じた。英語ができればツイッターにしても何でも英語で全部書けばいい。それができないから誤解を受ける」(2013年5月15日の記者団との質疑応答で)
- 6) 「世界各国が一番問題視しているのは、日本が国を挙げて女性を暴行、脅迫、拉致して、無理やりそういう仕事(慰安婦)に就かせた。日本以外の国は自由恋愛の建前の下でやっていたから問題はない、日本だけがいわゆる性奴隷を使っていた、と批判されている。本当にそうなのか。日本だけが特殊な話ではない」と持論を重ねて主張。(2013年5月16日、朝日新聞)

3. 分析と考察

3.1 人権と国境

データ1)においては、まず、「兵士」が人として、つまり、戦争の被害者として一つの人格として扱われているのに対して、従軍慰安婦制度は一つの制度として客体化され、そこで搾取されている女性の一人一人は不可視化され、脱主体化されている。このような非対称性を支えるのは、道徳や人権が、まずもって、自国の国民において優先されるのが当たり前、というディスコースの暗黙の了解だろう。そのような了解は、特に、戦争などの非常事態において、国内的には道徳的にふるまいながら、外国に対しては、非常に

残酷な行為をするというようなダブルスタンダードを可能にしてきた。更に、男性は性欲とは切り離して一つの人格で語られるのに対して、女性の人格は、性のあり方と密接に結びつけて規定されるというダブルスタンダードが、橋下氏の一連の発言の前提になっていると考えられる。

例えば、データ4)において、「罪のない人」という表現が成り立つのは、性欲が悪いもので、性サービスを提供する女性は、「罪がない」存在とはいき切れず、まったく被害者として、他の人格と対等に扱われなくても、やむをえないということが、ディスコースで暗黙に了解されているからではないか。そもそも、従軍慰安婦という婉曲表現の流通は、戦争という非常事態において、従軍慰安婦は、必要悪であるという前提に依拠していると考えられる。欧米の新聞では、日本語の慰安婦の直訳であるcomfort womenではなく、あえてsex slavesという訳語が使われるが、それは、戦時中に行われていたことが、性奴隷という表現こそ適切な、性の搾取を含むあらゆる形の人権侵害であるという指摘であり、そこに従事させられた女性をはっきりと被害者として名指しする目的を持つ。

それに対する反論が、6)のような「日本だけがいわゆる性奴隷を使っていた、と批判されている。本当にそうなのか。日本だけが特殊な話ではない」という答えでは、批判に答えたことにはならない。しかし6)の発言が日本国内の聞き手に対して、意味のあるものとして受け止められるのは、外国からの批判は、まず国から国への批判という枠組みで受け取るディスコースの了解といえる。しかし、20世紀以降、人類に普遍の真理や正義というものがあることが疑問視され、西洋文化を規範にする進歩史観の歴史化観から、文化相対主義、多文化主義へと価値観が多様化する中で、国際社会を横断して、個人を守るなんらかの普遍的な倫理が必要である、という切迫した必要性から生まれた人権という概念は、国境や国籍を超越することを必然としていたのではなかったか。人権の概念が、制度や体制や大義の中に飲み込まれてしまう「個人」を救い出そうとする試みであるという認識に立つならば、どの国がどの国を批判している、という前提を超えたところから、公人としての見解を示していかなくてはならないだろう。国境線という強固な前提を一旦保留にし、

公正を模索していくコミットメントが排除されてはならない。

3.2 性欲と性犯罪

データ3)と4)の橋下氏の発言を成り立たせているのは、性欲に対する、デフォルトのネガティブなイメージ、過剰な性欲と性犯罪の、直接的な因果関係が、言説の中で自然視されているからである。しかし性欲がたくさんある人が、性犯罪を犯すわけではない。性欲と性犯罪を直接的に因果関係で結びつけるのは、論理の飛躍であり、それを可能にするのが、性欲を即、悪者に結び付けるディスコースの前提である。

しかし、生と性は表裏一体であり、欲望そのものを否定的にとらえることはできない。フロイトの精神分析の知見では、性欲は人間の欲動の核にあるものとして、多様な発露を通じて人間の生をドライブしていくものとして位置づけられている³。性欲は、人間の欲望の重要な一部であり、そのエネルギーの発露を、どのように社会的に受容される形で、見つけるかということは、すべての人間に与えられたテーゼであり、可能性である。

一方、性犯罪を犯す時、人はその対象となる被害者のことを自分の欲望を満たすための道具とみなす。自分の欲望のために、反社会的なやり型で、誰かの尊厳を著しくきずつけることをよしとする。そこには人間の尊厳に対する、卑劣で破壊的な暴力がある。暴力を生み出す背景が、重層的、複合的に考察されなくてはならず、過剰な性欲や、満たされない性欲の問題に収斂するべきではない。性犯罪の問題が、性欲に対する対処方法によって、解決できるような単純なものでないことは、たとえば吉見(1995)が、以下のように指摘している。

軍や将校の記録に寄れば、占領地での強姦事件防止、および性病予防が慰安所設置の目的であった。ではその設置目的は達せられたのだろうか。前者から見てみよう。実際には、強姦事件はなくなるどころではなかった。(『従軍慰安婦』P.43)

ここでは、性犯罪の問題が性欲の対処療法だけでは解決されなかったことが示されている。しかし、日本社会にある、性犯罪と性欲を直接的に結びつけるディスコースの前提が、対処法で性犯罪が防げるという橋下氏の語りを

成り立たせる。けれども、人間の生に内在的な性欲を人から疎外し、性犯罪の問題をそこに収斂させてしまう前提は、性犯罪の背後にある根深い社会的問題を包括的に考えていく視点を排除してしまう危険がある。

例えば、学校から暴力をなくす対策として、教師がお金で雇った、殴られ屋のような人を連れてきて、「暴力をふるいたくなかった時は、この人をどんどん殴ってください。その代り『罪のない人』には暴力をふるってはいけません。」と言ったとする。それで、教室内の暴力問題を抜本的に解決したことになるのだろうか。個人、または集団の不満や暴力、憎悪のはけ口を、金銭的な合意を得たスケープゴートにむけるというやり方でも、社会は一旦安定するかに見えるかもしれない。しかし、暴力を疎外し、商品化する、このような対処法は、問題のすり替えであり、その本質を見えなくしてしまうだろう。同様に、性犯罪を直接的に性欲に結び付ける前提は、沖縄と本土との間にある祖国復帰や基地問題など、複雑な歴史的、社会的背景を見えにくくし、この問題の根が、ローカルな沖縄という場所にあるのではなく、日本全体の問題であることを隠蔽してしまうのではないか。

3.3 異文化コミュニケーションにおける、前提を問うことの重要性

データ2)に「僕が必要だと思っていた、と訳されるならやめてほしい」や、5)の「僕が英語さえ話せたら」という発言を支えているのは、日本のディスコースで当然視されている、英語のスキルさえ磨けば、日本語を機械的に英語へと変換することが可能で、外国とのコミュニケーションが問題なく行えるという、言語が無色透明な媒体であるという前提である。しかし言語は、文化的、社会的、そして歴史的に色づけされた、人々の生活様式や思考の枠組みである。つまり、言語を移動することは、単語の意味の変換ではなく、異文化を横断する、飛躍を必要とする、という認識が欠けている。言語が単なる知識であって、右から左へとそのまま移動できるようなものであるという前提で英語に取り組んでも、異文化コミュニケーションはうまくいかないだろう。3)で、司令官の凍りついた反応のことを、平然と記者に話しているところからも伺えるが、コミュニケーションの齟齬が、翻訳の問題

には収斂されないところにあるということ把握していないことこそ（何が問題なのかをはあくできていないこと）が、問題なのではないのか。

個々の語りを理解するとき、わたしたちは、語の表面的な意味の連鎖を超えて、ディスコースの秩序、（それは社会的文化的文脈とも言い換えることができる）を理解していなくてはならない。外国語の勉強をしたことがある人ならば、辞書で調べた語の意味を使って日本語に置き換えることはできても、出来上がった日本語の文が意味をなさなくて困った経験があるだろう。それは一つ一つの語が、他のどのような語との関係で意味を持たされているのか、その文に意味をもたらす、マクロな文化的社会的文脈や、その言語を話す人々の生活様式を理解していないことに起因する。外国語という他者の文脈に入っていくとき、私たちは言葉の、社会的文化的、文脈依存性を強く認識せざるをえないのだ。

しかし通常、母語である日本語で話しているとき、特にスムーズにコミュニケーションが行われているとき、私たちはめったに、自分たちが交換している言葉が、前提にしているもの、当たり前として了解している、背景的知識や世界観に注意を払わない。自分の前提が通用するところでの対話や議論は、複数の人によるモノログといえる。カールポパーは文化を「目に見えぬ牢獄」、ジームソンは「言語の牢獄」(The prison-house of Language)と表現したが、異文化コミュニケーションとは、この牢獄の外へと、新しい地平を求める試み⁴、といえるだろう。

自分の前提を疑問視することなく、交わされる言葉のやり取りは、表面的な同意か水掛け論に終始する。異なる言語や生活様式、文化的社会的背景を持つ、他者とのコミュニケーションは、自らが慣れ親しむ言説の秩序を一旦保留して、全く異なる前提からものを言う他者に向かって、真摯に向き合う姿勢からはじまる。それは前提をゆるがされる経験であり、だからこそ外国語を勉強することは、他者に開かれる経験になるのだろう。また英語の学習が、今まで自分もっていた日本語のディスコースの前提がゆるがされる経験をすることであり、自分を支えてきた自明性に、新しい地平を切り開いていく実践であるからこそ、英語教育と国際理解教育とは、根をひとつにする

と思われる。それが国際人育成のスタート地点であり、日本の教育にもとめられていることではないだろうか。

4. 結び

この論考では、橋下氏の発言を談話分析することで、日本社会のディスコースで、当たり前として、不可視化されてきた価値観を顕在化させ、その前提を問い直すことで、新しい議論の可能性を提示した。具体的には、橋下氏の発言から、日本社会のディスコースで、何が当たり前のこととして、了解されているかを、異文化コミュニケーションや相互理解ということを念頭に、国境と人権、性欲と性犯罪、異文化理解と英語教育という3点に焦点をあてて分析した。最後に、もう一度、なぜ前提を問うことが、大切なのかを論じて結びとしたい。

先日、授業中に、ある学生が、『われわれ日本人が、、、、、、』で始まる話は、いつもその続きが聞けない。だって、まず主語の『われわれ日本人』の中に、自分が入るのか、入らないのか、入れてもらえるのかどうか、と考えだして、そのことで頭がいっぱいになるから。その先は、何を言っていたとしても頭に入っていない。『われわれ日本人』がいったい誰なのかの方が、自分には大事だから」と発言した。

日本人話者に向かった語りにおいて『われわれ日本人』、で始まるテキストはさほど珍しいものではない。そこでは、聞き手が日本人であることが前提され、さらには、日本人というカテゴリーが自然視される。通常多くの人が注意を払うのは、『われわれ日本人』の先にある、術語の部分のみである。しかし、アメリカと日本のルーツを持つ彼女にとって、『われわれ日本人』は当り前の前提ではない。それは、それに続く術後の部分を、真っ白にしてしまうほど、ひっかかる部分なのだ。日本人とはだれを指すのか、自分はそのメンバーシップを与えられているのか、それは国籍の問題なのか、血の問題なのか。血は100%が要求されるのか。50%の場合はどうなのか。

日本人というカテゴリーが、自然視される日本のディスコースでは、多くの語りが、人種や国籍といったカテゴリーを問題視することなく、それを前

提している。しかし、日本人という前提を共有できない人もいる。共有できない人と、理解しあおうとするならば、自然視してきた前提を問うてみなくてはならない。自己が依拠する前提をゆるがされるのは、安定を揺るがされることであり、心地良い経験ではない。しかし、今日、異文化コミュニケーションが必然となり、他者理解ということが、大きなテーマとなっている中で、私たちに求められているのは、当たり前のことを問うてみる、というはじまりなのではないか。例えば、当たり前として取り扱ってきた、日本人というカテゴリーを問うてみれば、この便利な認識枠組みが、排除と包摂のメカニズムと、切り離せないといったことが見えてくる。

また、日本のディスコースで異文化というと、外国が前提されがちだが、異文化はもっと身近なところにもあるという自覚も大切だろう。同じ言語を話す人のうちにも、無数のサブカルチャー、サブディスコースがあり、同じ前提が共有されているわけではない。この論考では射程外とするが、例えば沖縄と本土との間にある、基地問題などを巡るコミュニケーションの齟齬も、双方の議論が依拠する、前提のずれを明らかにするところから、始めていかなくてはならないのではないか。国際化や国際人という言葉は、外国を前提してしまっているが、一見反対方向に見える、内に向かった問題意識と両立できてはじめて、真実味をおびてくる、と思われる。

忘れてはならないのは、わたしたちが、自分の所属する社会で共有される特殊なやり方で、ことばの世界に区切りを入れ、世界を認識し、共有された前提に依拠しながら、語りを生産し、理解しているという目に見えない制限だ。自由に語っているように見えても、わたしたちの語りは、社会的文化的文脈から自由ではない。構築主義的知見（上野, 2005）が、さまざまな形で指摘してきたように、私たちの認識を支えるカテゴリーは、本質的属性を持つ何かを名指すのではなく、そこに「所属する」と「所属できない」ものの表裏一体の関係が生み出す“言葉が作り出す現実世界”であり、普遍性を持つものではない。

思考は、ディスコースという空間の制約を受ける。しかしそこで共有される前提が、時空を超える普遍的な価値ではない以上、前提を問い直すことで、

わたしたちは常に新しい思考や、知見へと開かれる可能性を持つ。だからこそ、語られたこと的前提を問うという試みが、異文化コミュニケーション、今後の外国語教育へ示唆することも少なくないと思われる⁵（井筒, 1985）。

-
- ¹ 相互行為の秩序がディスコースの秩序を分析するツールの中には、ゴフマンのフレームやフッティングなどもあるが、それらは、話者によって戦略的に使われる能動性を持つ。よってディスコースで自然視されているものを顕在化させるこの論考では、分析ツールとして前提をもちいる。
- ² 橋下氏の「米軍も風俗業を活用すべきだ」との発言について、米国防総省の報道官は13日、朝日新聞の取材に対して「我々の方針や価値観、法律に反する。いかなる問題であれ、売春によって解決しようなどとは考えていない。ばかげている」と話した。（2013年5月14日、朝日新聞）
- ³ フロイトは、人間の活動の源となるエネルギーをリビドーと呼び、必ずしも性行為を目指すわけではないが、対象を通じて抑圧されたものを取り戻そうとするその心的なエネルギーを性欲的なものであると考えた。性欲動を軸にしたフロイトの欲動論は、のちに「生の欲動」と「死の欲動」の欲動二元論に展開し、そこで性欲動は生欲動の一部とみなされるようになった。
- ⁴ ポバーは「文化的枠組み」がもたらす「不可共約性」による異文化間のコミュニケーションの困難を指摘したが、井筒俊彦は、表層的な意味世界から、意味の深みへと移動することで、文化的枠組みを乗り越える、ガダマーのいう「地平融合」が可能であるとする。
- ⁵ 井筒俊彦は、トマスクーンの異文化間の「不可共約性」を乗り越える可能性として、意識の表層の意味世界ではなく、意識の深層領域に働く意味可能体の場所、つまり、意味の分節が行われんとする、意味可能体の場所（ガダマーのいう「地平融合」と通じる）という概念を提示している。

参考文献

- 井筒俊彦 1985 「人間存在の現代的状況と東洋哲学」『意味の深みへ 東洋哲学の水位』岩波書店 3-45.
- 上野千鶴子編 2001 『構築主義とは何か』勁草書房
- 児玉徳美 2008 『言葉と論理—このままでいいのか言語分析』開拓社
- ショシャナ・フェルマン 1998 『女が読むとき 女が書くとき—自伝的新フェミニズム批評』下河辺美知子訳 勁草書房
- 中村桃子 2001 『ことばとジェンダー』勁草書房
- 林礼子 2002 「コミュニケーションにおける相互行為」高原脩・林宅男・林礼子編『プラグマティックスの展開』勁草書房 123-153.
- 吉見義明 1995 『従軍慰安婦』岩波新書p43
- Fairclough, Norman. 1989. *Language and Power*. London: Longman.
- Fairclough, Norman. 1995. *Critical Discourse Analysis: the Critical Study of Language*. London: Longman.
- Gumperz, John and Levinson, Stephen. 1996. *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, Deborah. 1994. *Approaches to Discourse*. Cambridge: Basil Blackwell.
- Van Dijk, Teun A. 1984. *Prejudice in Discourse: An Analysis of Ethnic Prejudice in Cognition and Conservation*. Amsterdam: Benjamins.
- Wodak, Ruth. 1996. *Disorders of Discourse*. London and New York: Longman.